

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720276

研究課題名(和文)自己調整学習の枠組みを用いた語彙学習指導モデルの構築

研究課題名(英文) Proposing a model for vocabulary teaching by Incorporating a self-regulated learning approach

研究代表者

水本 篤 (Mizumoto, Atsushi)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80454768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、自己調整学習の枠組みを用いて、自律的な英語語彙学習を指導によって活性化させる方法を探り、そこから、より良い自己調整語彙学習指導モデルの具体的な提言を行うことであった。まず、指導実践の前に、先行研究のレビューから自己効力感と語彙学習方略、そして自己調整学習との関係を探り、より良いモデルを検討した。そして、そのモデルに基づいた指導実践を行い、その効果を検証した。その結果、自己調整学習の枠組みを利用した、語彙学習指導モデルは効果的であるということが確認された。

研究成果の概要(英文)：The current study aimed to explore a teaching model for autonomous/self-regulated vocabulary learning by incorporating a self-regulated learning approach. It also intended to propose a better model for instructing self-regulated vocabulary learning. By reviewing the literature, the relationship between self-regulated learning and self-efficacy was examined. Based on the suggested model, teaching practice was carried out to test whether the model was pedagogically effective or not. The results showed that the treatment group showed a steady increase in self-efficacy and vocabulary knowledge compared with the contrast groups. The findings from the current study provide empirical evidence suggesting that through a self-regulated learning approach, it might be possible to enhance self-efficacy, which in turn may contribute to the development of vocabulary knowledge.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育 語彙学習 方略指導 自己調整学習 自己効力感 学習者要因 質問紙調査 コンピュータ
適応型テスト

1. 研究開始当初の背景

語彙学習は外国語学習者にとって最も重要なものの1つであるということは、語彙学習が4技能(リスニング、リーディング、ライティング、スピーキング)に含まれていないにも関わらず、語彙学習(語彙習得理論)や指導に関する専門書(例えば相澤他, 2010; Nation, 2001; 望月他, 2003など)が多いことから容易に理解できる。特に日本のように日常生活において英語に触れる機会が少ないEFL(English as a Foreign Language)の環境においては、欧米の研究で重要であるとされている多読などによる偶発的語彙学習(implicit vocabulary learning)が起こりにくい状況であるため、意図的な学習が重要であるということも主張されている(Folse, 2004)。1970年代後半からの学習方略の研究(O'Malley & Chamot, 1990; Oxford, 1990; McDonough, 1995; Cohen, 1998; Cohen & Macaro, 2007; 竹内, 2003)においても、学習方略の分類の中ではほとんどのものが語彙学習に適応できるものであることから、語彙学習方略の重要性がわかる(Schmitt, 1997)。

過去の海外、国内の語彙学習方略の研究においては、(1)習熟度の違いによって、学習者は語彙学習方略を計画的に使う上位群と、計画的に使わない下位群に分けることができる(例えば、Ahmed, 1989; Kojic-Sabo & Lightbown, 1999; Sanaoui, 1995)。そして、(2)語彙学習方略と習熟度は(相関)関係が見出せるものがある(例えば、Fan, 2003; Gu & Johnson, 1996; 前田 他, 2003)。そして(3)語彙学習方略の使用は学習環境、動機づけ、性別など変数によって影響がある(例えば、Catalán, 2003; Gu, 2002; 堀野・市川, 1997; Nakamura, 2002)ということが明らかになっている。ただし、「この語彙学習方略のみを使用していれば、語彙習得が効果的に行われるというものはなく、学習成功者はより多くの方略を組み合わせながら、自分のニーズや学習スタイルに合った方略を選ぶ。そして、どのような方略であったとしても、計画的かつ継続的にその方略を使用することが大切である」というFolse(2004)の指摘にもあるように、どれか1つの方略を学習者が学べばよいというものではないということがわかっている。

また、認知方略(声に出して覚えるなどの具体的な方法)だけでは、語彙学習方略指導には効果的ではなく、メタ認知の指導も併せて行うことでより高い効果が得られることがわかっているため(Rasekh, & Ranjary, 2003), Mizumoto and Takeuchi (2009)では、語彙方略指導の有効性の実証研究を行い、その効果を方向している。しかし、これまでの研究では、メタ認知のような計画・実行・振

り返りの指導も含めているものの、学習者の動機づけ、目標設定、自己モニタリング、そして学習環境のコントロールなどが、指導によってどのように変化していくのかは明らかにされていない。

「自己調整学習」(Self-regulated Learning)は、Zimmerman(1989)の定義によると、「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」となっている。学習方略研究は、国際的な流れとして、特に教育心理学の分野において、自己調整学習の一環として議論されることが1990年代以降多くなってきている(Dörnyei, 2005)。その中で、ESL/EFLを対象とした外国語教育学においても、Tseng, Dörnyei, and Schmitt(2006)のように、語彙学習における自己調整学習を測定する質問紙の開発のような研究が現れてきている。このような流れは、前述のように学習方略のみを対象とした研究では、学習者が能動的に学習を行う状況を十分に考慮に入れていないために、明らかでないことが多かったことが原因で起こってきていると考えられる。

近年、教育心理学の分野では、自己調整学習指導の介入研究の効果をメタ分析した論文も発表されている(Dignath & Büttner, 2008; Sitzmann & Ely, 2011など)。学習の機構として、より包括的な自己調整学習における研究結果を、外国語教育における語彙学習方略研究に援用し、発展させていくことには大きな可能性があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの語彙学習方略指導をより深化させた形として、自己調整学習の枠組みを用いて、自律的な語彙学習を指導によって活性化させる方法を探り、そこからより良い語彙学習指導モデルの具体的な提言を行うことを目的とした。本研究の目的は、1)自己調整学習の枠組みを用いて、自律的な英語語彙学習を指導によって活性化させる方法を探り、そこから2)より良い自己調整語彙学習指導モデルの具体的な提言を行うことにある。

3. 研究の方法

自己調整学習の枠組みを用いた、自律的な語彙学習を指導によって活性化させる実践の前に、先行研究のレビューを行い、自己効力感と語彙学習方略の関連を探るために、281名の大学生英語学習者に、使用している語彙学習方略を自由記述で回答してもらい、その方略と自己効力感の関係をテキストマイニングで探

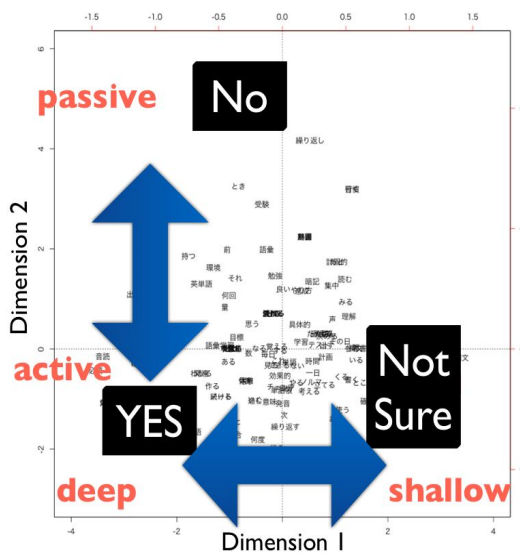
る。(研究方法の詳細は、「5. 主な発表論文等」の雑誌論文4を参照のこと。)

303名の大学生英語学習者を対象として、自己調整学習の枠組みを利用した語彙学習プロセスが、自己効力感、そして語彙知識の習得にどのような影響を及ぼすのかを調査する。(研究方法の詳細は、「5. 主な発表論文等」の雑誌論文1を参照のこと。)

8ヶ月にわたる自己調整学習の枠組みを用いた語彙学習の指導によって、自己効力感と語彙知識の習得に変化があるのかを調査する。指導の効果を確認するために、115名の大学生英語学習者を処置群と対照群(習熟度に応じて上位と下位)に分けた。(研究方法の詳細は、「5. 主な発表論文等」の雑誌論文2を参照のこと。)

4. 研究成果

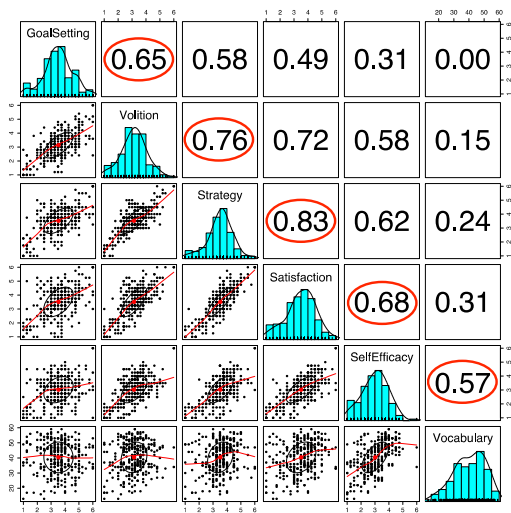
自己効力感と語彙学習方略の関連



上図はコレスポネンス分析の結果を图示したものである。高い自己効力感を持っている学習者(図中左下"YES"のグループ)は、自律的・能動的で深い語彙学習方略を用いていることがわかる。一方、自己効力感の低い学習者(図中上方"No")は、使用している語彙学習方略に特徴はなく、受け身の語彙学習になっていることがわかる。また、自己効力感を持っているか持っていないかがはっきりとしていない学習者(図中右下"Not Sure")は、使用している語彙学習方略は自律的・能動的であるものの、浅い方法(単純に繰り返すなど)になっている。このような学習者に対しては、より深い語彙学習方法を用い、自己効力感を高めていけるような指導方法が

必要であることがわかった。

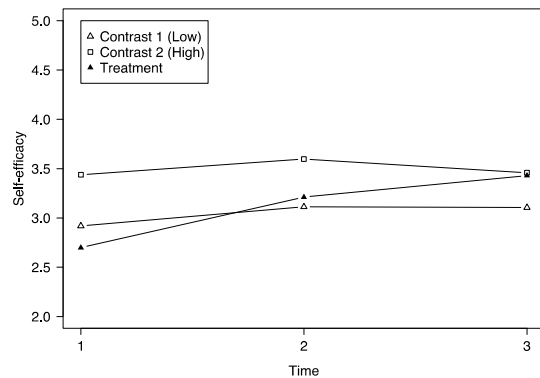
自己調整語彙学習プロセスが自己効力感と語彙知識の習得に及ぼす影響



上図は調査で使用した変数の関係を图示したものである。自己調整学習の枠組みを利用した語彙学習プロセスは、目標設定(Goal Setting)に始まり、意思コントロール(Volition)、使用する方略のコントロール(Strategy)、使用した方略への満足度(Satisfaction)、そして自己効力感(Self-efficacy)へとつながり、最終的に自己効力感の高い学習者がより語彙知識の習得(Vocabulary)ができているという関係性がわかる。そのため、自己調整学習の枠組みを利用した語彙学習プロセスの指導を行うことによって、自己効力感と語彙学習へのポジティブな効果が予測できるという結果が得られた。

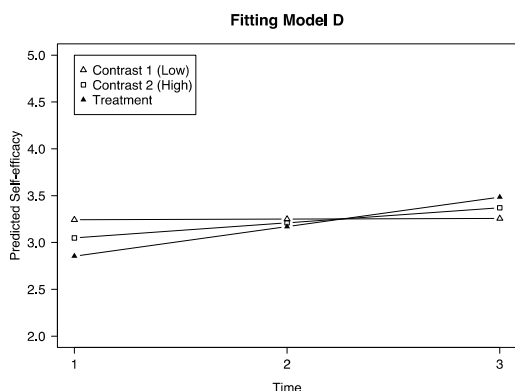
自己調整学習の枠組みを用いた語彙学習の指導効果の検証

Plotting Raw Scores



上図は自己調整学習の枠組みを用いた語彙

学習の指導によって、指導前(1)、指導中(2)、指導後(3)にどのように、自己効力感に変化があったかを図示したものである。



指導前(1)の段階で、3つのグループの自己効力感に違いがあることがわかるため、マルチレベルモデルによって、もともとの差を調整し、変化のモデリングを行ったのが上図である。この結果から、指導によって、もともと自己効力感が3群でもっとも低かった処置群(Treatment)が、対照群(Contrast 1とContrast 2)よりも、最終的に高い自己効力感になっていることがわかる。

以下の表は、指導前(Pretest)と指導後(Posttest)に実施した語彙テストの基礎統計量を示している。

Group	n	Pretest ($\alpha=0.91$)		Posttest ($\alpha=0.91$)		Gain	
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Treatment	39	41.67	8.36	45.41	7.65	3.74	3.80
Contrast 1	40	38.23	9.81	39.28	9.83	1.05	3.04
Contrast 2	36	45.75	9.52	47.25	9.66	1.50	3.28

Note. The possible range for scores was from 0 to 60.

また、以下の表は群間の語彙テストにおける変化の差を多重比較した結果である。

Comparisons	Difference	95% CI		p	d
		Lower	Upper		
Contrast 1 - Contrast 2	0.45	-1.40	2.30	0.832	0.14
Contrast 1 - Treatment	2.69	0.88	4.51	0.002	0.78
Contrast 2 - Treatment	2.24	0.38	4.10	0.014	0.63

上記の結果からも、自己調整学習の枠組みを用いた語彙学習の指導によって、語彙知識の習得に違いが出ることが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Mizumoto, A. (2013) Effects of self-regulated vocabulary learning process on self-efficacy. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 7, 253-265. DOI:10.1080/17501229.2013.836206 査読あり

Mizumoto, A. (2013). Enhancing self-efficacy in vocabulary learning: A self-regulated learning approach *Vocabulary Learning and Instruction*, 2, 15-24. DOI:http://dx.doi.org/10.7820/vli.v02.1.mizumoto 査読なし

水本 篤 (2013).「英文解析プログラムから得られる各種指標を使ったテキスト難易度の推定 教材作成への適用可能性」『外国語教育メディア学会(LET)関西支部メソドロジー研究部会 2012 年度 報告 論集』 141 - 150. http://www.mizumoto.com/method/2012-11_Mizumoto.pdf 査読なし

Mizumoto, A. (2012). Exploring the effects of self-efficacy on vocabulary learning strategies. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 3, 423 - 437. <http://sisaljournal.org/archives/dec12/mizumoto/> 査読あり

Takeuchi, O., Ikeda, M., Mizumoto, A. (2012). The cerebral basis for language learner strategies: A near-infrared spectroscopy study. *Reading in a Foreign Language*, 24, 136-157. 査読あり
<http://nflrc.hawaii.edu/rfl/October2012/articles/takeuchi.pdf> 査読あり

Takeuchi, O., Ikeda, M., Mizumoto, A. (2012). Reading aloud activity in L2 and cerebral activation. *RELC Journal*, 43, 151-167. DOI:10.1177/0033688212450496 査読あり

[学会発表](計 6 件)

Mizumoto, A., Yamanishi, H., & Urano, K. "Incorporating a self-regulated learning approach into vocabulary learning courses." (Vocab@Vic 2013) 2013年12月18日 Victoria University of Wellington, New Zealand

水本 篤 “Creating an in-house computerized adaptive testing (CAT) program with Concerto” 日本言語テスト学会 (JLTA) 第 17 回全国研究大会 2013 年 9 月 21 日 早稲田大学

Mizumoto, A. “Enhancing self-efficacy in vocabulary learning: A self-regulated learning approach” (Symposium on Vocabulary Instruction and Learning 2013) 2013 年 6 月 29 日 九州産業大学

水本 篤「マルチレベルモデルのはなし」外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2012 年度第 2 回研究会 (共催: 言語テスト・第二言語習得合同勉強会) 2012 年 11 月 10 日 流通科学大学東京オフィス

Mizumoto, A. “The effects of self-efficacy on self-regulated vocabulary learning” (Independent Learning Association Conference 2012) 2012 年 9 月 2 日 Victoria University of Wellington, New Zealand

水本 篤「語彙学習における自己効力感を高める要因 自己調整学習の枠組みを用いた調査」第 38 回全国英語教育学会愛知研究大会 2012 年 8 月 4 日 愛知学院大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://mizumot.com/handbook/>

<http://langtest.jp>

6. 研究組織

研究代表者

水本 篤 (MIZUMOTO, Atsushi)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 80454768

以上